

1. 博士論文題目
2. 本研究の目的、意義、方法
3. 論文の構成
4. 論文の説明
5. これまでの研究経過
6. 参考文献
7. 研究業績

1. 博士論文題目 : La structure polyphonique dans les œuvres de Samuel BECKETT  
サミュエル・ベケット作品におけるポリフォニー構造

2. 本研究の目的、意義、方法 :

ベケット(Samuel Beckett, 1906-1989)の諸作品(小説、詩、戯曲、映画、テレビ、ラジオ)におけるポリフォニー構造の体系的分析を行なう。「ポリフォニー」(Polyphonie)とは、元来「対位法を用いた多声音楽」を意味し、バフチンによって初めてテキスト分析に用いられた概念である。バフチンはポリフォニーを「多声的なもの」、すなわち登場人物間や作者-読者間における対話的關係のシステムを示す語として広く用いている。本博士論文においても、ポリフォニーを多声的な構造全体を指す語と定義した上で、ベケット作品における、登場人物間、作者-読者間、異言語間、エクリチュール間、テキスト間のポリフォニックな構造を明らかにしてゆきたい。

ベケット作品は、バフチンやシクロフスキーがポリフォニー文学の典型とするスターン、ラプレー、ジョイスの多大な影響の下に執筆された。だがそれにも関わらず、これまでポリフォニー文学とは無縁とみなされてきたのは何故か。その大きな原因として考えられるのが、我々がベケット作品に対して抱く「貧しさ」のイメージである。すなわち、削ぎ落とされた文体、閉鎖的な時空間、登場人物の過少性といった特徴が、豊かな対話を基本とするポリフォニーとは相反するものと位置づけられてきた点である。これまで「声の複数性」についての研究はみられたものの、その対象は、実際に複数の声を持つ人物達が登場する戯曲など数作品に留められてきた。小説などモノログ体で書かれた多くの作品については、語り手Jeが特定のキャラクターを示し、一貫した語りを行なうという前提の下、声や主体の複数性と結び付けられることは殆どなかった。その証拠に「沈黙」、「中断」、「反復」といったベケット特有の執筆方法も、これまで「一貫した語りの挫折」や「作者の執筆困難」を表わすものとして否定的に捉えられる傾向にあった。

ところが、ベケットの物語は、バディウも述べるように「実際は複雑な行程を成すもの」なのであってモノログ体の中にこそポリフォニックな構造があると考えられる。実際、一作品の語り手はそもそも複数性を示しており、他作品の語り手や登場人物達と相互にネットワークを形成している。バフチンは「交響楽のテーマをピアノ用に編曲し直す」と、我々の内にある「モノログ優位主義」を批判しているが、ベケットも同様の批判を思わせるエピソードを幾つか残している。我々は表層に現れた言葉を「希少性」(rareté)として捉え直すこと、つまり書かれた筈の物語、一度書かれたが削除された物語、後に書かれるかもしれない物語、などあらゆる物語の可能性を常に考慮に入れることにより、ベケット作品を出来るだけ自然な形で浮かび上がらせなくてはならない。

バフチンのポリフォニー論を中心に、クリステヴァの間テキスト性理論やライブニッツの可能世界論にも言及しつつ論を進めたい。テキストの比較分析を中心とするが、言語の問題にとどまらず、SFやハイパーテキストとの関連から時空間と虚構世界の関わりについても考察してゆきたい。

### 3. 論文の構成：

#### 0. 序

#### 1. エクリチュールにおける沈黙と変奏

##### 1-1. 語りと沈黙の共存

###### 1-1-1. 矛盾

###### 1-1-2. 交響楽

##### 1-2. レ・エクリチュール

###### 1-2-1. 英語版 / 仏語版

###### 1-2-2. 草稿 / テキスト

##### 1-3. 沈黙を含むモノローグ

###### 1-3-1. 無限循環

###### 1-3-2. 順列組み合わせ：必然に基づく偶然性

#### 2. 閉鎖した多世界

##### 2-1. 「手続きの作者」ベケット：伝達（一貫性）の不在と対話（矛盾）の可能性

###### 2-1-1. ベケットはモダニストかポスト・モダニストか：作者の権威にまつわる一考察

###### 2-1-2. 仮の語り手

###### 2-1-3. 相互契約

##### 2-2. 閉鎖空間と分身

###### 2-2-1. 内なる自己

###### 2-2-2. 分身の対話

#### 3. マルチフォーム・ストーリーとしてのテキスト

##### 3-1. 共存在性

###### 3-1-1. 登場人物

###### 3-1-2. エクリチュール

##### 3-2. オープン・スタート / クローズ・エンド

###### 3-2-1. SFとの比較

###### 3-2-2. 記憶の組み合わせ

#### 4. 並行多世界のダイナミズム

##### 4-1. 縦断する物語

###### 4-1-1. 『芝居』

###### 4-1-2. 『行ったり来たり』

##### 4-2. 二幕物における反復の再考

###### 4-2-1. 『ゴドーを待ちながら』

###### 4-2-2. 『幸せな日々』

#### 5. ハイパーテキストとベケット

##### 5-1. 間テキスト性理論から

##### 5-2. ポリフォニックなテキスト

##### 5-3. 完成の条件

#### 6. 結論

### 4. 論文の説明：

#### 0. 序

#### 1. エクリチュールにおける沈黙と変奏

##### 1-1. 語りと沈黙の共存

###### 1-1-1. 矛盾

『名づけえぬもの』における矛盾した一フレーズ「しゃべりながらも沈黙している」を例に、語りと沈黙の共存在性について探る。ベケット作品の大半に沈黙が偏在することから、沈黙を含む言葉やエクリチュールの多様性を意識する必要性を論じる。「実際は複雑な行程を成し、様々な文学的手法がみられる」ベケット作品の位置づけ。

###### 1-1-2. 中断と反復

矛盾表現と共に頻出する、中断や反復表現にまつわる考察。これまで「作者の執筆困難を示す」と言われてきたこれらの表現が、実際のところ意図的に用いられ、執筆の重要

な条件として機能していた点を示す。その根拠として、一貫性を備えたフレーズの間に、中断、反復表現が加筆された箇所（『マロウンは死ぬ』草稿）を示す。

### 1-1-3. 交響楽

ベケットが執筆の理想的状況として挙げる「交響楽」というテーマが、バフチンのポリフォニー論においても重要である点を指摘。ベケットは処女作品『並みには勝る女たちの夢』（1932年）と、その五年後に書かれたドイツ語の書簡の中で、ベートーベンの交響楽における音の分裂のエネルギーを文学創作に応用できないものか思案している。分裂の契機となる要素が「沈黙」であり「揺らぎ」であると書かれていることから、テキスト中の沈黙、矛盾、中断、反復表現も、文学に交響乐的なものをもたらそうというベケットの願望の現れである点を述べる。

## 1-2. レ・エクリチュール

### 1-2-1. 英語版 / 仏語版

ベケットはアイルランド人でありながらフランスで40年近くを過ごし、英仏両言語で多くの作品を残した。そこには「自己翻訳」の域に留まらない、様々な書き換えが見られる。書き換えは、場所や登場人物の固有名、さらには年齢などの数字にまでも及ぶ。異言語間における意味的差が少ない固有名や数字を書き換えることにより、決定性の高い要素も無数の可能世界の一つである点を示そうとしたのではないか。その点を考察する。

### 1-2-2. 草稿 / テキスト

『マロウンは死ぬ』と『見ちがい言いちがい』の草稿分析。ジャック・ネーフによれば、『見ちがい言いちがい』の冒頭五十行は出版直前に切り取られ、『ある夜』の英仏両版として出版された。今日全く別のものとされている作品が元々一つのテキストを構成していた点から、ベケットが一つの閉じたテキスト空間の中で複数のバージョンを生み出そうと考えていたと仮定する。

## 1-3. 沈黙を含むモノローグ

### 1-3-1. 無限循環

『ゴドーを待ちながら』のウラジーミルによる無限循環の歌と、バッハのカノンの構造を比較する。モノローグという閉じた空間における自己と自己の対話について追求する。

### 1-3-2. 順列組み合わせ：必然に基づく偶然性

ベケットにおける「対話」が「伝達」とは切り離されて論じられる必要性を示す。「伝達」は時に、一貫性を強い矛盾を排除する暴力的な場と成り得る。ベケットは「コミュニケーション」に懐疑的であった点と、順列組み合わせを好んだ点から、閉鎖空間における差の創出、すなわち「対話」を重要視していたことを明らかにする。

## 2. 閉鎖した多世界

### 2-1. 「手続きの作者」ベケット：伝達（一貫性）の不在と対話（矛盾）の可能性

#### 2-1-1. ベケットはモダニストかポストモダニストか：作者の権威にまつわる一考察

これまで二分されてきた「主体や自己同一性を脱構築するテキストを残したポストモダニストとしてのベケット」と「作者の権威、起源に固執した反ポストモダニスト（モダニスト）としてのベケット」の共存可能性について述べる。その根拠として、ベケットが作品の内容ではなく形式において厳密さを求めた点を挙げる。自己翻訳の過程で、内容面での書き換えが積極的に行なわれたのは、一つに守るべきストーリーが存在していなかったことの良い表れである。ベケットの作品世界への介入は、多様な解釈の可能性を拡大するための行為であったとも考えられるのではないか。この点を、ジャネット・H・マレーの「手続きの作者」(procedural author) の理論（「テキストそのものを書くと同時に、テキストが生じるルールを書く」）と結び付けて論じる。

#### 2-1-2. 仮の語り手

『名づけえぬもの』と『反古草子』を例に、ベケットが「仮の」語り手と物語を予め設定することにより、語りの不在を内包する語りの実現を目指した点を述べる。

### 2-1-3. 相互契約

ベケットが『ブルースト論』において強調する「契約」と、サールの虚構世界論にまつわるエーコの「相互契約」理論との共通性を探る。『名づけえぬもの』のJeは、「まるでおれが彼であるみたいに、いや、まるでおれが彼でないみたいに、（中略）あるいは別のだれかのなかにいるみたいに、そのとき彼は、マーフィとか、モロイとか言う、（中略）まるでおれがマロウンでもあるかのように」と過去の作品の登場人物との交換可能性を示す。「手続きの作者」ベケットが、大きな閉鎖空間の中に置かれた複数の作品の関係性を通して執筆を行なっていった過程を明らかにする。

## 2-2. 閉鎖空間と分身

### 2-2-1. 内なる自己

『伴侶』の登場人物MとWと、森尚也が分析する『なおのうごめき』草稿におけるMとWの類似点を指摘することにより、それらが互いに自己の中の分身を示し、対話を通して間接的に外部世界を捉える存在である点を述べる。

### 2-2-2. 分身の対話

後期作品には「見ること」、「聞くこと」、「触ること」から切り離された「幽霊」の如き存在が多く描かれる。『見ちがい言いちがい』、『クワッド』、『人べらし役』、『見ればわかる』における複数の登場人物がその例として挙げられるが、彼等は自己の分身達なのであり、存在を獲得するために言葉に頼らない対話を行ない続ける。キットラーの理論を参考に、ベケットの求める沈黙の対話とは如何なるものなのかを追求する。

## 3. マルチフォーム・ストーリーとしてのテキスト

### 3-1. 共存在性

#### 3-1-1. 登場人物

ベケットの登場人物は、一作品という枠を越えて登場する。『マーフィ』の「ピム」と「ボム」は『なに どこ』に、「ウィリー」は『幸せな日々』に再登場する。また『マロウンは死ぬ』の中には、「マーフィ」、「メルシエ」、「モロイ」、「モラン」が登場し、それは『名づけえぬもの』においても同様である。注目すべきは、『名づけえぬもの』の中でも見られることであるが、過去の登場人物や出来事が執筆順序と逆行する形で描かれることである。ここには「変更可能な過去」と「定められた未来」という設定が窺える。

#### 3-1-2. エクリチュール

『マロウンは死ぬ』の草稿によると、これまで「語り手」と「作中人物」に二分されてきた「マロウン」と「マックマン」の名が、それぞれ「M-」「M...」とだけ記されていたことが分かる。このことから、ベケットは登場人物達の立場を予め決定することなく、執筆過程で浮かび上がらせていった点を指摘する。「M」は『伴侶』や『なおのうごめき』や『あしおと』にも登場する上、多くの登場人物の頭文字でもある点を考慮に入れた場合、未決定の登場人物と未決定のエクリチュールの中でベケットが創作を行なっていったことが推測される。ベケット作品が、複数の物語を含み持ちながら執筆されたものとして認識され直す必要について論じる。

### 3-2. オープン・スタート/クローズ・エンド

#### 3-2-1. SFとの比較

ウォリックによれば、SFは「閉鎖され、確定した過去」と「開放され、未確定な未来」によって構成されている。それに対しベケットは、「未確定な過去」と「確定した未来」を中心に世界を描こうとした。虚構世界の可能性に対するベケットの考えを、ベケット自身も読んだと言われるヴォネガットなど幾つかのSF作品との比較を通して追求する。

### 3-2-2. 記憶の組み合わせ

『クラブ最後のテーブル』では、似通った幾つかのフレーズが繰り返されるが、これら

はそもそも予め決定された一長文の断片であることが分かる。「未確定な過去」と「確定した未来」というベケット独自の時間概念は、「予め決定されたフレーズ」と「継起的順序を越えた組み合わせ」から生み出された点を示す。

## 4. 並行多世界のダイナミズム

### 4-1. 縦断する物語

#### 4-1-1. 『芝居』 4-1-2. 『行ったり来たり』

『芝居』においては、骨壺に入れられた三人の登場人物が異なる内容を同時に語ることにより、並行した多世界が描かれる。また、『行ったり来たり』でも同じく三人の登場人物が坐る場所を入れ替えながら物語を展開させる。並行する物語がどのように関わり合いながら時空間が形成されているのかについて探る。

### 4-2. 二幕物における反復の再考

#### 4-2-1. 『ゴドーを待ちながら』 4-2-2. 『幸せな日々』

これまで、第二幕が第一幕の続きであると考えられてきた『ゴドーを待ちながら』であるが、「それぞれの幕がパラレルに生じた可能世界を示している」という仮説も立てられるのではないかと。というのも、第一幕冒頭は「開始」を意味しておらず、ゴドーが現れないラスト・シーンは、二幕共同一表現で書かれているからである。これまで「待てども待てども現れない存在」とされてきたゴドーは、元々「現れない」ことが定められた存在である。重要なのは、ゴドーが何者かと問うたり、現れないことの原因を探ることではなく、無数に考えられ得る「待つ方法」なのではないか。この観点から考察を行なう。またこの考察を、やはり二幕が相似している『幸せな日々』についても行なう。

## 5. ハイパーテキストとベケット

我々は、ポリフォニー構造を備えた作品とポリフォニックに関わることによって、新しい文学形態を創出することが出来るのではないかと。ポリフォニーとはまさにハイパーテキストが表出するものである。パフチンの翻訳と編集を担当したカレル・エマソンは、「パフチンにとって全体とは完成した統一体ではない。それはつねに関係性である。(中略)従って、全体を最終決定したり残しておいたりすることは不可能なのだ。全体が現れると、定義上それはつねに変化にさらされているわけである」と述べる。ベケットのテキストも未決の断片の集まりであり、それぞれの同時共存と交換の可能性を保障することこそが完成の条件である。

## 6. 結論

### 5. これまでの研究経過：

修士論文では『マロウンは死ぬ』を対象を絞り、主体の根源的不在の問題を扱った。これまで行なわれてきた「マロウンの自己同一性の喪失」という解釈が成り立たない点を、英仏テキストの書き換え箇所から示し、「複数の主体が組み換えられる過程を通して自己同一性を獲得してゆく状況」を仏語版草稿と仏語版テキストの書き換え箇所から示した。ケルト語という母語を持ち、英語とフランス語を常用したベケットのアイデンティティの問題とも重ね合わせて論じた。

博士論文においては、複数言語と書き換えの問題を発展させて第一章に取り入れる。言語の問題にとどまらず、時空間とフィクションの関係についても追求してゆきたいため、ベケットも読んでいたされる超越論哲学と分析哲学双方の著作を読み進めている。パフチンのポリフォニーにまつわる記述も追求しているが、パフチンとベケットは「モノローグ」に対しては異なる立場を示しているようにも考えられるので、現在その点について検証中である。

基本的に全作品を分析対象とする予定であるが、これまでは主に小説を扱ってきた。ベケットが実際に演出した戯曲の内、未入手のものに関しては出来るだけ早く入手して研究を進めて行きたいと考えている。

## 6. 参考文献：

ベケット作品（出版年代順。仏語版はF、英語版はEと略記。）

### A. 小説

- *Murphy*, London, John Calder, 1938 (F : *Murphy*, Paris, Minuit, 1947).
- *Molloy*, Minuit, 1951 (E : *Molloy*, Paris, The Olympia Press, 1955).
- *Malone meurt*, Minuit, 1951 (E : *Malone Dies*, John Calder, 1958).
- *L'Innommable*, Minuit, 1953 (E : *The Unnamable*, New York, Grove Press, 1958).
- *Watt*, Grove Press, 1953 (F : *Watt*, Minuit, 1968).
- *Nouvelles et Textes pour rien*, Minuit, 1955 (E : *Stories and Texts for Nothing*, Grove press, 1967).
- *Sans*, Minuit, 1969 (E : *Lessness*, London, Calder and Boyars, 1970).
- *Le Dépeupleur*, Minuit, 1970 (E : *The Lost Ones*, Calder and Boyars, 1972).
- *Mercier et Camier*, Minuit, 1970 (E : *Mercier and Camier*, Calder and Boyars, 1974).
- *Compagnie*, Minuit, 1980 (E : *Compagny*, John Calder, 1980).
- *One Evening*, in *Journal of Beckett Studies* No. 6, Autumn 1980, p. 7-8.
- *Mal vu Mal dit*, Minuit, 1981 (E : *Ill seen Ill said*, Grove Press, 1981).
- *Stirrings Still*, New York, Blue Moon Books, 1988 (F : *Soubresauts*, Minuit, 1989).
- *Comment dire*, Paris, Librairie Compagnie, 1989 (E : *What is the Word*, in *As the Story Was Told*, John Calder, 1990).
- *Dream of Fair to Middling Women*, ed. Eoin O'Brien et Edith Fournier, London, Calder Publications, 1993.

### B. 戯曲

- *En attendant Godot*, Minuit, 1952 (E : *Waiting for Godot*, Grove Press, 1954).
- *Fin de partie*, Minuit, 1957 (E : *Endgame*, London, Faber and Faber, 1958).
- *Krapp's Last Tape and Embers*, Faber and Faber, 1959 (F : *La Dernière bande suivi de Cendres*, Minuit, 1959).
- *Happy Days*, Grove Press, 1961 (F : *Oh les beaux jours*, Minuit, 1963).
- *Play*, Faber and Faber, 1963 (F : *Comédie*, Minuit, 1966).
- *Film*, Grove Press, 1970.
- *Not I*, Faber and Faber, 1973 (F : *Pas moi*, Minuit, 1975).
- *That Time*, Faber and Faber, 1976 (F : *Cette fois*, Minuit, 1978).
- *Ghost Trio, A television play*, Grove Press, 1976 (F : *Trio du Fantôme*, in *Quad et autres pièces pour la télévision - suivi de L'Épuisé par Gilles Deleuze*, Minuit, 1992).
- *Fragment de théâtre II, dans Pas suivi de quatre esquisses*, Minuit, 1978.
- *Rockaby*, Grove Press, 1981 (F : *Berceuse*, Minuit, 1982).
- *Quad et autres pièces pour la télévision - suivi de L'Épuisé par Gilles Deleuze*, Minuit, 1992.

### C. 評論

- *Proust*, London, Chatto and Windus, 1931.
- *Disjecta : Miscellaneous Writings and a Dramatic Fragment*, ed. Ruby Cohn, Grove Press, 1984.

### ベケット研究書

- ADMUSSEN (Richard L.), *The Samuel Beckett Manuscripts: A study*, Boston, G. K. Hall and Co., 1978.
- BADIOU (Alain), *Beckett : L'incroyable désir*, Paris, Hachette, 1995.
- BERNAL (Olga), *Langage et fiction dans le roman de Beckett*, Paris, Gallimard, 1969.
- BRATER (Enoch), *Why Beckett*, London, Thames and Hudson, 1989.
- CLÉMENT (Bruno), *L'Œuvre sans qualités : Rhétorique de Samuel Beckett*, Paris, Seuil, 1994.
- COHN (Ruby), *Back to Beckett*, Princeton, Princeton University Press, 1973.
- CONNOR (Steven), *Samuel Beckett : Repetition, Theory and Text*, Oxford, Basil Blackwell, 1988.
- CRONIN (Anthony), *Beckett - The last modernist*, London, Harper Collins Publishers, 1996.
- DUROZOI (Gérard), *Beckett*, Paris, Bordas, 1972.
- FEDERMAN (Raymond), *Journey to chaos*, Berkeley, University of California Press, 1965.
- FEDERMAN (Raymond) / FLETCHER (John), *Samuel Beckett - His Works and His Critics*, University of

California Press, 1970.

- FITCH (Brian T.), *Beckett and Babel : An Investigation into the Status of the Bilingual Work*, Toronto, University of Toronto Press, 1988.
- GROSSMAN (Evelyne), *L'Esthétique de Beckett*, Paris, SEDES, 1998.
- HARVEY (Lawrence E.), *Samuel Beckett : Poet and Critic*, Princeton University Press, 1970.
- JANVIER (Ludovic), *Beckett par lui-même*, Seuil, 1969.
- KNOWLSON (James), *Damned to Fame - The life of Samuel Beckett*, New York, Touchstone, 1996.
- MERCIER (Vivian), *Beckett / Beckett*, New York, Oxford University Press, 1977.
- MURPHY (P. J.), *Critique of Beckett Criticism : A Guide to Reseach in English, French, and German*, Columbia, Camden House, 1994.
- SIMON (Alfred), *Samuel Beckett*, Paris, Les Dossiers Belfond, 1989.
- 近藤耕人『眼と言葉』、創樹社、1995年。

### ベケット研究論文

- BLANCHOT (Maurice), « Où maintenant? Qui maintenant? », *Le Livre à venir*, Paris, Gallimard, 1959, p. 256-264.
- BRYDEN (Mary), « Beckett / Deleuze / Guattari : Gender in Process », *Women in Samuel Beckett's prose and drama*, Lanham, Barnes & Noble Books, 1993, p. 58-69.
- BRYDEN (Mary), « The schizoid space : Beckett, Deleuze, and *L'Épuisé* », *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui* No. 5, 1996, p. 85-93.
- FLETCHER (John), « Malone 'Given Birth Into Death' », *Twentieth Century Interpretations of Molloy, Malone Dies, The Unnamable*, ed. J. D. O'Hara, Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1970, p. 58-61.
- FOURNIER (Edith), « Marcel Mihalovici et Samuel Beckett, musiciens du retour », *Revue d'Esthétique* Numéro hors-série, 1990.
- KENNER (Hugh), « The Trilogy », *Samuel Beckett's Molloy, Malone Dies, The Unnamable*, New York, Chelsea House Publishers, 1988, p. 31-50.
- NEEFS (Jacques), « " Où maintenant? Quand maintenant? Qui maintenant?" Commencement chez Samuel Beckett », *Textes réunis par Bernhild Boie et Daniel Ferrer, Paris, Genèses du roman contemporain : Incipit et entrée en écriture*, CNRS Éditions, 1993, p. 121-150.
- PÉTEL (Gilles), « Des mots et des larmes », *Critique* No. 519-520, Octobre 1990, p. 725-736.
- RENNER (Charlotte), « The Self-Multiplying Narrators of Molloy, Malone Dies, The Unnamable », *Samuel Beckett's Molloy, Malone Dies, The Unnamable*, Chelsea House Publishers, 1988, p. 95-114.
- RUYTER-TOGNOTTI (Danièle), « Mise en image, mise en texte dans *Mal Vu Mal Dit* », *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui* No. 1, 1992, p. 58-68.
- RUYTER-TOGNOTTI (Danièle), « Le monde et le pantalon - Miroir de la poétique beckettienne - », *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui* No. 2, 1993, p. 111-123.
- SCHMITZ (Peter), « Tracing Samuel Beckett », *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui* No. 1, 1992, p. 35-40.
- THOMAS (Yves), « État actuel des manuscrits de Beckett », *Sur la génétique textuelle*, Amsterdam - Atlanta, Éditions Rodopi B.V., 1990, p. 165-171.
- VIALAS (Philippe), « Figures de l'errance », *Critique* No. 519-520, Octobre 1990, p. 719-724.
- 田尻芳樹「(ポスト)モダニズム」、『ベケット大全』、白水社、1999年、193-195頁。
- 森尚也「サミュエル・ベケットのモナド・機械・他者 - 無窓性のドラマトウルギー - 」、『思想』930号、2001年10月、147-164頁。

### その他

- BADIOU (Alain), *Conditions*, Paris, Seuil, 1992.
- BAKHTINE (Mikhail), *La poétique de Dostoievski*, traduit du russe par Isabelle Kolitcheff, présentation de Julia Kristeva, Seuil, 1970.
- BAKHTINE (Mikhail), *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Âge et sous la Renaissance*, traduit du russe par Andrée Robel, Paris, Gallimard, 1970.
- DERRIDA (Jacques), *La Voix et le phénomène*, Paris, Presses Universitaires de France, 1967.
- ECO (Umberto), *The role of the reader : explorarions in the semiotics of texts*, Bloomington, Indiana University Press, 1979.
- ECO (Umberto), *Les limites de l'interprétation*, traduit de l'italien par Myriem Bouzaher, Paris, Bernard Grasset, 1992.
- ECO (Umberto), *Sémiotique et philosophie du langage*, traduit de l'italien par Myriem Bouzaher, Presses

- Universitaires de France, 1993.
- FOUCAULT (Michel), *L'archéologie du savoir*, Gallimard, 1969.
- GENETTE (Gérard), *Figures III*, Seuil, 1972.
- GOODMAN (Nelson), *Fact, Fiction and Forecast*, Indianapolis, Hackett, 1978.
- GOODMAN (Nelson), *Ways of Worldmaking*, Hackett, 1978.
- HOFSTADTER (Douglas R.), *GÖDEL, ESCHER, BACH : An Eternal Golden Braid*, New York, Basic Books, 1979.
- KITTLER (Friedrich A.), *Gramophone, film, typewriter*, translated by Geoffrey Winthrop-Young and Michael Wutz, Stanford, Stanford University Press, 1999.
- KNOWLSON (James), *Universal Language Schemes in England and France 1600-1800*, University of Toronto Press, 1975.
- KRISTEVA (Julia), *Le texte du roman*, Hague, Mouton Publishers, 1970.
- KRISTEVA (Julia), *Polylogue*, Seuil, 1977.
- LANDOW (George P.), *Hypertext : The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology*, The John Hopkins University Press, 1992.
- LEIBNIZ (Gottfried W.), *La monadologie*, par Émile Beutroux suivi d'une note sur les principes de la mécanique dans Descartes et dans Leibnitz par Henri Poincaré, Paris, Delagrave, 1930.
- LODGE (David), *After Bakhtin : Essays on fiction and criticism*, Curtis Brown Group, 1990.
- MURRAY (Janet H.), *Hamlet on the Holodeck*, New York, Charlotte Sheedy Literary Agency & Sterling Lord Literistic, 1997.
- RYAN (Marie-Laure), *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory*, Indiana, Indiana University Press.
- SEARLE (John), *Expression and Meaning*, Cambridge, Cambridge University Press, 1979.
- SERRES (Michel), *Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques : étoiles, schemas, points*, Presses Universitaires de France, 1968.
- SERRES (Michel), *La communication, HERMES I*, Paris, Minuit, 1969.
- SERRES (Michel), *L'interférence, HERMES II*, Minuit, 1972.
- SHKLOVSKI (Victor), *Résurrection du mot*, traduit du russe par Andrée Robel, Gérard Lebovici, 1985.
- VONNEGUT (Kurt), *Cat's cradle*, New York, Dell Publishing, 1963.
- VONNEGUT (Kurt), *Slaughterhouse-five*, New York, Delacorte Presse / Seymour Lawrence, 1969.
- WARRICK (Patricia S.), *The Cybernetic Imagination in Science Fiction*, Massachusetts, Massachusetts Institute of Technology, 1980.
- 西垣通 『ペシミスティック・サイボーグ - 普遍言語機械への欲望 - 』、青土社、1994年。
- 三浦俊彦 『虚構世界の存在論』、勁草書房、1995年。

## 7. 研究業績：

### 学位論文

- 「DE L' «ABSENCE ORIGINELLE» A L' «HARMONIE» DANS *MALONE MEURT* : Étude sur les réécritures de Samuel BECKETT」、アミアン大学大学院文学研究科、D.E.A.論文、2000年9月。
- 「LE DÉCHIFFREMENT DE L'ABSENCE : Les réécritures dans *Malone meurt* de Samuel Beckett」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、修士論文、2001年1月。

### 雑誌論文

- 「ベケットにおける悲劇性について - モロイと母の部屋をめぐる - 」、『名古屋大学人文科学研究』第27号、1998年3月、49-66頁。
- 「LE DÉSIR INFINI VERS LA SUBSTANCE INCONSCIENTE : Analyse sur les contradictions dans les *Œuvres* de François VILLON」、『多元文化』創刊号、2001年3月、1-23頁。
- 「L'ABSENCE DISSIMULÉE : Autour de *Malone meurt* / *Malone Dies* de Samuel Beckett」、『青山フランス文学論集』第10号、2002年1月、115-135頁。
- 「ベケット 『マロウンは死ぬ』 解説 - レ・エクリチュールの分析を中心に - 」、日本フランス語フランス文学会 『フランス語フランス文学研究』第82号、2002年8月、掲載予定。

### 学会発表

- 「根源的不在と調和 - 『マロウンは死ぬ』におけるレ・エクリチュールをめぐる」、日本サミュエル・ベケット研究会、2001年7月7日。

- ・「ベケット『マロウンは死ぬ』解説 - レ・エクリチュールの分析を中心に - 」、  
日本フランス語フランス文学会、2001年11月4日。